

第2回公開講演会

心を伝えるデザイン書道 ―豊橋筆と共に生まれた作品たち―

デザイン書道家

鈴木 愛

はじめまして、デザイン書道作家の鈴木愛と申します。本日は皆様の貴重なお時間をいただきましてありがとうございます。

現在私はロゴ等の広告に使用する筆文字の仕事をメインとして、アート作品の受注制作、年賀状デザイン、個展での作品発表、イベントでのパフォーマンス、愛知大学オープンカレッジなどでデザイン書道教室の講師をしております。

デザイン書道という言葉には馴染みのない方も多いかもかもしれません。デザイン書道は、伝統的な書道のように書き方などの決まりは一切ございません。何をしても間違いではないという自由な世界です。たとえば、書き順を変える・左手で書く・文字の上下を逆さまに書く・筆の持ち方を変える・目隠しで書くなどの方法を使って書くこともあります。フォントのように規格された文字と違い、何らかのイメージを持って頭に飛び込んでくるので印象に残りやすいといわれています。

デザイン書道で一番の大きなテーマは「文字に思いを込める」ということです。思いを表現することは一見難しいように感じるかもしれませんが、頭の中でイメージを膨らませながら、あるいは願いを込めながら文字を描くことによって、そこに思いが宿るのだと信じて日々創作に取り組んでいます。ゼロから作品を生み出すのは難しいと感じることもありますが、やりがいのある面白い世界です。見た時に笑顔になってもらえるような作品を沢山残すことができたなら、最高の幸せだと感じています。

デザイン書道の中でも商品ロゴやお店の看板など広告目的に使用される文字のことを商業書道といいます。

商業書道は広告としての書であるため、お客様からのご要望を確実に取り入れ、商品あるいは店舗・企業の特徴を表現し、人目を引きつける魅力があり、なおかつ誰にでも読めることが理想です。個展で発表するようなアート作品のデザイン書道とは違い、様々な枠組に拘束されます。

書道は小学校入学と同時に習い始めました。書き初め大会などで大きな紙に書くことが特に好きで、時間を忘れて夢中で取り組む楽しさを覚えました。しかし、父の転勤が多く転校を繰り返していたため同じ先生のもとへ通うことは難しく、書道の授業で筆を取るだけの時代が長く続きました。

そのように大好きだった書道ですが、2002年に商業書道と出会うまで、書道を仕事にしたいとは一度も考えたことがありませんでした。高校3年生でそろそろ進路を決めるという時、書道の先生に「書道科がある大学へ行ったらどう？」と勧められたのですが、「私には他に夢があります」ときっぱり断るほどでした。



小さい頃からの夢は幼稚園の先生になることだったのです。短大に入学するもののそこでは幼稚園教諭の資格が取れなかったため、大学への編入を目指し予備校に通いました。大学の合格が決まり念願だった幼稚園での教育実習が始まりました。

でも実習を続けるうちに自分には向いていないと痛感してしまったのです。理由は2つあります。保育のプロとして大切なのは何十人もの子どもに対して同時に目を配り、それぞれの成長過程に合わせて適切な遊びを提供することでした。しかし私の場合は視野が狭く、自分に近づいてくる特定の子どものしか目に入っていなかったのです。そういうタイプの人は未来の子供達のためにも幼稚園の先生にならないほうが良いと大学の教授に言われました。そしてもう1つは実習中私に飛びついて来た子どもに驚き、とっさに支えることができず、その子を落としてしまったことです。幸いその子にケガもなく無事でしたが、かけがえのない命を預かるという重みを感じ、ただ子どもが好きだけでは務まらないのだと思い至りました。

周りの友達が次々と幼稚園への就職を決めて行く中、私は就職活動もできずにそのまま卒業しました。官公庁で非常勤職員として働きながら、目標もなく毎日を何となく過ごしていました。この頃は大学の授業料を払ってくれた両親に申し訳なくとも苦しかったです。

「もう私に残された道は結婚しかないのかも」と思いまして、花嫁修業として習い事をしようとカルチャースクールのパンフレットを見ていた時、ふと高校時代の恩師に「書の道に進んだら」と言われたことが頭をよぎりました。書道をもう一度やってみようかなと思ったその時、商業書道という文字が私の目に飛び込んできたのです。それは広告としての筆文字をどのように描けば良いのかを学ぶ講座でした。今まで見ていた書とはまったく違う独創的な文字が、人に求められ仕事として成立するというのを初めて知りました。「そんな魅力的な世界があったのだ」と見学もせずすぐに申し込んだことを覚えています。仕事になるかどうかはともかく、自分の中に新しい可能性が見えました。子どもの頃から好きだった書の道に遠回りしながらやっと辿り着いた気がしました。

でも実際に習い始めると、文字をデザインするということがなかなか思うようにできず、「これでは仕事にするのは無理だなあ」と力のなさを痛感しました。それでも今まで習ってきた書道とはまったく違い、自由に様々な表現ができる商業書道の世界に惹かれていきました。

そのような時、転機がやってきます。祖母の介護のため、両親が千葉から実家のある豊橋に引越したことです。私はその時一人暮らしをしていたのですが体調不良となり、両親がいる豊橋に一時的にお世話になるつもりで帰ってきました。

商業書道を習っていた場所は東京でしたので教室は辞めざるを得ず、商業書道から一度離れたことで、さらに「書きたい!」という思いを強くしました。仕事も辞めて時間だけはあり余るほどだったので、毎日毎日ただひたすら書き続けました。たとえば「丹波黒大豆」や「とうふ鉢」など、実際に発売されているパッケージの文字を自分なりに創作するという具合です。そしてクライアントさんから実際にご依頼いただいた状況をイメージし、「おいしそうに」「高級感を出して」「親しみやすく」などと自分自身で課題を設定して書いていました。毎日書くことが楽しくて仕方がなく、1日が終わるのがあつという間でした。

暫くして東京の先生の元へ月に一回通うようになり、書き溜めた作品を指導していただけることがとても貴重な時間になりました。商業書道と出逢って1年が経ったある日、先生が「そろそろ一人でやってみないか」とおっしゃったのです。当時の私にはプロとして仕事にできる自信などまったくなかったのですが、先生が私の営業用パンフレットを作ってくくださったのを機に覚悟を

決めました。

そして2003年2月、フリーランスで商業書道作家として活動を始めます。仕事として1つでも世の中に作品を発表することが先生への恩返しになると考え、苦手な営業活動を始めました。筆文字を使う機会がありそうな業種をタウンページで調べ、20社ほどにパンフレットを送りました。そして送った先にお電話をしまして、「何年後でも結構ですので、筆文字を使う機会がございましたらプレゼンだけでもさせていただけたいです。」と思いを伝えました。

当然と言いますかほとんど断られまして「こんなことをしていないで会社に就職しなさい」と叱られたり、「こんなもの送ってきて、どういうつもりだ!」とすごい剣幕で怒られたり散々でした。それからは営業ではなく謝るための電話になりました。せっかく先生がDMを作ったのに私が台無しにしては申し訳ないと思い、電話をかけ続けました。

そのような中、お電話をした関谷醸造様に驚くことを言われます。「ちょうど新しいお店を建てる計画があるのですが、パンフレットを見て看板の文字を書いて欲しいと思っていました。」と仰ったのです。私は絶句してしまいました。「書いて欲しい」と言われたような気がするけれど、違うような気もすると混乱してしまいまして、「それではプレゼンに参加させていただけるということでしょうか」と申しますと、「うちはプレゼンなんてしないから。一度打ち合わせをしたいので来てください」とのことでした。それは本当に驚きでした。まだ仕事の経験もなく見ず知らずの私にいきなり新店舗の看板のお仕事を下さったのです。

営業活動はこれをきっかけにすべてやめました。これが最初で最後の仕事になるかもしれないと思ったからです。制作期間は約1年、後悔が残らないよう全身全霊で新店舗のロゴである「ほうらいせん吟醸工房」とその店内で使用する13点のロゴに取り組みました。

未だに信じられないような出来事ではありますが、私が世に出るきっかけを下さった関谷醸造様には心から感謝しております。

私の初仕事となった関谷醸造様の新店舗「吟醸工房」にはギャラリーが併設されていたのですが、2004年のオープニングイベントの際にギャラリーが空いていたら様にならないということで、急遽私の初個展をすることが決まりました。当時アート作品が1点もなかった私は、オープン2ヶ月前から死物狂いで作品を創ったことを覚えています。思いがけない形でアート作品を創作する世界に導かれたのですが、さまざまな制約の中で描く「商業書道」とはまったく違い、自分の好きな文字を好きなようにあった表現できるアート作品の創作が楽しくて仕方ありませんでした。その個展がきっかけで「こういう仕事をする人がいるんだ」と知ってくださる方が増え、少しずつお仕事のご依頼をいただくようになります。

今でも私の営業活動は個展を開くことです。私は「受け身の営業」と言っているのですが、自ら売り込むことはしなくても、作品を気に入ってくださったことがきっかけでご依頼いただける流れが、私の性に一番合っていると感じております。

「商業書道」と「アート作品としてのデザイン書道」、この二つはまったく別の性質を持っていますが、両方とも一生を掛けて取り組んでいきたいと思える大きな柱となっています。

デザイン書道作家としての活動を始めて今年で12年目になりますが、現在までに採用された作品は1480点程です。活動当初のことを思うと信じられないような気持ちになります。ひとつひとつのお仕事が一期一会なのだと思うと一切の妥協はできず、長らくお待たせすることも多いのですが、素敵な方々との出会いに恵まれてここまで続けることができました。

冒頭でも少しふれましたが、次は作品制作の一番大きなテーマである「思いを文字に込める」

ということについてお話しさせていただきます。

ご依頼をいただいて描く際に一番気をつけているのは、クライアントさんの思いや情熱を私が代わって表現する代筆業であるという心構えです。その方が日頃大切にしている思い・ご苦労されていること・これから実現したい夢などを伺うことで、その方の考えに共感し文字に思いを込めることができると思うのです。「思い」とは「目に見えないもの」ですが、ここが欠けてしまうと「ただ単に情報を伝える文字」となり、「感情に訴える文字」にはならないと思っています。

ですから、文字を描くときはクライアントさんのお顔や話されていた内容を思い出しながら、幸せを願って書くことに一番気を配っています。

また作品の仕上げを描く日を選ぶことも大切だと思っています。何か心が殺伐となるような出来事があった日に最終仕上げを描くことはできません。その文字にネガティブな感情が入ってしまうからです。下書きや構想を練るのはいつでもできますが、仕上げる日は特別です。心を良き状態に持つていくために一番必要なのは質の良い睡眠ですが、描く作風に合わせて聴く音楽を選んだり、お香を焚くなどして作品に集中できる環境を作ります。

数年前まではただがむしゃらに毎日創作に取り組んでいましたが、東日本大震災の惨状を目にし、作品がまったく描けなくなった経験をきっかけに気が付いたことがあります。それは新月から満月にかけての2週間が創作に一番適しているのだということです。

あの惨状をテレビで見てショックを受けた私は、仕事としての文字を描くことはできても、アート作品の創作がまったくできなくなりました。吟醸工房で毎年開催していた個展が目前に迫り、アート作品の創作にチャレンジするのですが、何をどう頑張ってみても描けず涙しか出てこない日々が続きました。そのようなある日、突然世界がガラッと変わったように作品が描けるようになります。その1日でどんどんアイデアが湧いて来て描く手が止まらないのです。前日までの苦しみは何だったのかと不思議に思い暦を調べてみたところ、それが新月の日だったことがわかりました。さらに調べてみると月の満ち欠けは出産と深い関係があり、出産するのは新月と満月の日が多いこともわかりました。作品を生み出すと考えればその2週間に創作できるのはとても自然なことでした。良き日に仕上げることは、良き思いを込めることも容易にできます。

その経験で自分自身が自然の一部であることが良く理解できましたので、描けない日に無理をして作品を仕上げることはなくなりました。そういった日は下書きや構想を練るのに留め、心を込める作業はしません。もちろん急ぎのお仕事は別ですが……。

作品をご覧になった方から、「どうしてこういう発想が浮かぶの？」と聞かれることがあります。その要素としてひとつ思うのは、小さな頃からの習慣です。小学校低学年まで、寝る時には毎晩母が童話の読み聞かせをしてくれていたのですが、頭の中でお話の情景を思い描きながら眠ることが習慣になっていました。また空想することは日常茶飯事で、空を見上げては色々な形に変化する雲に思いを馳せ、ストーリーを考えて遊ぶことも好きでした。大人となった今でもその空想癖は変わらずにあります。今となってはそれが役立っているような気がしています。

速回りしながらも自分が「好き」なことが仕事になった今では、どのような困難なことがあってもありがたいと思うようになりました。すべての出来事には意味があつて、無駄なことは何一つ起こらないと考えるからでしょうか。一見ネガティブな出来事に直面したとしてもそれは自分が成長できるきっかけであり、そこから学ぶ機会をいただいているのだと受け止めようになりました。自然の流れに逆らうことなくすべての出来事を自然体で受け止めることが精神的な安定に繋がり、それは作品にも反映されるようです。

書道具の墨／筆／硯／紙、すべて自然のもので出来ています。墨は同じでも、摩る硯の種類が違えば墨の色は変化しますし、紙の種類によって、また気候によってもどんどん変化します。自分の思い通りにコントロールしようとしても無理なのです。そこから、自然に合わせて創作することの大切さを学びました。その時々の変化を受け入れ楽しめば、その時にしか書けない文字が生まれます。

これからも「自然体」をテーマに、私の文字で誰かのお役に立てるよう、精一杯の努力を重ねていきたいと思います。

ここからは商業書道やデザイン書道について、作品の画像をご覧いただきながら説明させていただきたいと思います。

1. ほうらいせん吟醸工房（関谷醸造株式会社様／店舗ロゴ）



私の初仕事となった関谷醸造様のお店です。量り売りをメインとしたお店で、若い方達による新たな試みが凝縮されたお店でした。創業130年の伝統をけがさないように重厚感を意識しつつも、新たな可能性を感じさせるような文字に仕上げました。

2. 豊橋カレーうどん（豊橋観光コンベンション協会様／ブランドロゴ）



カレーうどんを実際に試食させていただき、そのイメージで描かせていただきました。完成版の豊橋カレーうどんは、下からごはん・とろろ・カレーうどんの順ですが、試食した当時はカレーうどんの上にとろろがかかっていたのです。小さなお子様でも食べられるようなまろやかな味だけれども、食べ終わるとスパシーさを感じましたので、「カレー」の部分はスパシーさを表現するためスピード感や勢いを意識し、「うどん」はつるつるモチモチとしたのどごしを連想させるようなイメージです。「ん」でどんぶりの形を表現しています。ご依頼いただいた際に、このロゴは幟で使う場面が一番多くなると伺っておりましたので、幟のサイズの中で文字が一番魅力的に美味しそうに見えるよう構図にこだわりました。文字だけでなく配色もすべて私に任せてくださったので、とても思い入れのある作品となりました。

3. 豊（豊橋市教育委員会様／広報誌表紙デザイン）



「豊橋の子どもたちが豊かな心を持って未来へ向かい歩んで行けますように」という願いを込めて描きました。「豊」の部分が意図せず豊橋市のキャラクターであるトヨッキーのようになっていますが、これはこども達をイメージしています。光に向かって道を歩いているような、はたまた波に乗っているようなイメージで描きました。

4. 愛（豊橋市民愛市憲章推進協議会様／50周年記念ロゴ）



豊橋市民愛市憲章から「愛」の漢字を使用しデザインしています。豊橋市の皆さんが「市を愛する心」を持って、輝かしい未来へ向かい胸を張って歩いていく（走っていく）姿を表現しています。

- ・心をあわせ美しい町を作りましょう
- ・よく働き豊かな町をつくりましょう
- ・愛情をもちあたたかい町をつくりましょう
- ・きまわりを守り明るい町をつくりましょう
- ・教養をたかめ文化の町をつくりましょう

この標語は「豊橋の皆さんが幸せに過ごせるようお互いに努力しましょう」というメッセージなのだと私なりに解釈いたしました。「5つの目標＝幸せの種」とも捉えることができます。記念ロゴ「愛」の中にある「心」には「幸せの種」があり、皆さんがそれぞれの心の中で幸せの種を育てていけるよう、大きな心で優しく包み込んでいるようなイメージも合わせて表現いたしました。こちらは配色もすべて任せていただきましたので、イメージを文字だけでなく色でも併せて表現することができ、とてもやりがいがありました。

5. ええじゃないか豊橋（豊橋市様／プロモーションビデオタイトル）

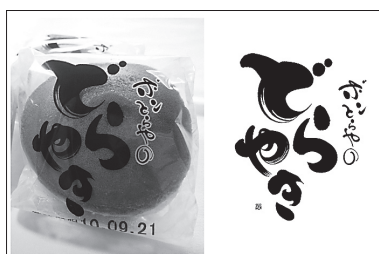


菅原浩志監督作の豊橋市プロモーションビデオが今年の初夏に仕上がりました。その映像内で使用されるタイトル文字を担当させていただきました。

昨年の夏にロゴの制作に入り、菅原監督が掲げていらしたテーマである「情熱」を表現すべく奮闘し納品を完了しました。今年に入りいよいよすべての映像が仕上がったとの連絡が入ります。菅原監督から「一度映像を見てください」と言われました。実際に映像を拝見しましたら、その「情熱」は私の想像を遥かに超えていました。その素晴らしい映像に私の提出した文字のイメージがまったく合わないと思い、こちらから書き直しをさせていただきたいとお願いしました。そのような経緯で仕上がったタイトルです。実際に映像を見てエネルギーを感じてから書くと、こんなにも込められるエネルギーが違うのだと改めて実感しました。

私も豊橋筆の紹介のため、大筆でパフォーマンスしているシーンで撮影に参加させていただいております。

6. ボンとらやのどらやき（ボンとらや様／商品ロゴ）



年代を問わず多くの方に親しみを持って召し上がっていただけるどらやきにしたいというご要望のもと、丸くてほっとするような文字にしました。

お店では私の写真やプロフィールなども掲示してくださっているので、その効果なのか今でもよく色々な方から「愛さんのどらやき食べたよ」と声を掛けていただきとても嬉しく思っています。

7. 風味堂 (風味堂様/店舗ロゴ)



豊橋市東脇にありますお持ち帰りの餃子専門店です。定年退職後にご夫婦で餃子屋さんを始めたいというお客様からのご依頼でした。ご主人がお肉の卸業で長年お勤めされていたことからお肉には人一倍詳しく、それを活かして最高の素材でおいしい餃子を作りたいとのことでした。「退職後の楽しみだから儲けはிரらない」と、かなりお手頃な価格設定でしたが、素材へのこだわりを前面に押し出すため

安っぽくならない様、かつ気軽に立ち寄れる親しみの持てる文字にしました。個人的にここの餃子が大好きです。皆さんもぜひ召し上がってみてください。

8. 濱納豆物語 (國松本店様/商品ロゴ)



ご年配の方には浸透している豊橋名産「濱納豆」ですが、若い方にも知っていただきたいという思いで贈答用のパッケージを新しくする際にロゴを担当させていただきました。若いお母さん方にも親しみを持って手に取っていただけるよう、丸くコロコロとしてかわいらしい雰囲気を取り入れました。私はご依頼をいただいてから初めて食べたのですが、生姜が効いたお味噌のような何とも奥深い味わいにすっかりは

まってしまいました。この濱納豆は発酵食品ですので、食べた翌日にはお肌が綺麗になるのがわかりました。今では曲尺手町café Fusionにて「濱納豆チョコケーキ」としても活躍中です。すごく美味しかったです。日替わりケーキのメニューですので常時置いてあるわけではないですが、お勧めです。

9. 芝桜の丘 (茶白山高原協会様/観光地看板)



「茶白山高原 天空の花回廊 芝桜の丘」の看板です。文字に関しては特にご要望があったわけではなく、すべて任せていただきました。観光地ということで飽きのこないデザインであるように注意しました。「茶白山高原」はどっしりと重みを出して、「天空の花回廊」は高さをイメージさせるような動きを出し、「芝桜の丘」の部分は地面を這って横に広がる芝桜と爽やかな高原の風が吹き抜けていくイメージで書きました。

10. 東栄町 (東栄町様/町名ロゴ)



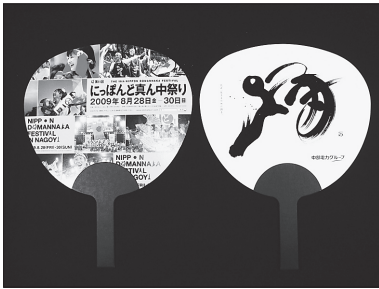
見た時に癒されほっこりとした気分になれるようなロゴを目指しました。かわいい鬼が踊っている姿や、山に恵みの雨が降り注ぎ人々の心も潤い、夜空には星が輝き町を優しく照らしている情景もイメージしています。

11. 花まつりの湯（とうえい温泉様／温泉ロゴ）



神秘的な花祭りのイメージがベースになっています。とうえい温泉のキャラクターであるかわいい鬼の「おにスターくん」と人間のお客さんが一緒になって「いい湯だねえ。極楽極楽。」と目を閉じ、「今日も幸せだなあ。」と感じている雰囲気を出したかったので、温かく癒されるイメージでまとめました。温泉がぶくぶくと湧いているイメージも合わせて表現しました。

12. 踊（中部電力株式会社様／お祭りでの配布用団扇）



こちらは「どまんなか祭り」で中部電力グループのPRうちわとして使用されたものです。こちらは文字もイメージもすべて私に任せていただきました。自由な気持ちで気負いなく楽しく描くことができました。熱気でほとばしる汗とともに人が踊り太鼓を打ち鳴らしているイメージで描いています。

13. 飛（関谷醸造株式会社様／商品ロゴ）



飛と書いて中国語でフェイと読むこのお酒は、「まさに飛んでいるように」書いてほしいと言われました。セントレア空港限定で発売されるということでしたので、飛行機が大空に向かって勢い良く飛び立つところをイメージして書きました。お酒にはしずる感が大切かと思い、にじみを出して表現しています。

14. いい人生（墓石文字）



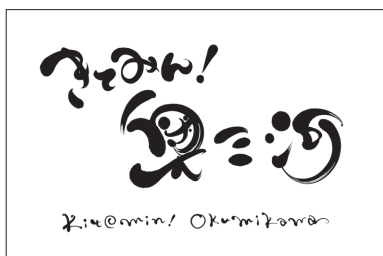
墓石に使用する文字です。最近では「〇〇家之墓」ではなく、このように言葉や漢字をデザインして墓石に彫るものも多くなっているようです。なかなか深いお言葉で私に書けるのかどうか不安もありましたが、ご家族のみなさんがお墓をお参りされる時、この文字を見て励まされたり、新たな力がわいてくるような、そのような風に何かを感じてもらえるような文字を書きたいと思ってがんばりました。同時に「ここにいつでもいるよ」という安心感を感じていただきたいと思い、どっしりとした重厚感を出しました。

15. 久保田会トートバッグ (東海三県久保田会様／販促グッズ)



東海三県久保田会様からのご依頼の販促用トートバッグです。一升瓶が1本入るサイズ、2本入るサイズ、多目的に使用できるトートバッグの3種類です。日本酒「久保田」を販売する酒販店さんで販売されるとのことで、「酒」という文字を「徳利からお猪口へ美味しそうなお酒が滴り落ちている」様子を絵的に表現しました。トートバッグという使い方からして、一目見ただけではっきり「酒」と読めるよりは、持っている本人がわかる位の可読性で良いと判断したからです。

16. きてみん！ 奥三河 (きてみん！ 奥三河実行委員様／イベントタイトル)



愛知県主催、新城市／設楽町／東栄町／豊根村で開催されたアート事業ロゴです。アーティストの作品展示を様々な会場で行い、アーティストのワークショップを数多く開催する企画でした。参加者の皆さんがアートを体感し、うきうきした気分と笑顔をイメージして描きました。

17. 真光寺 (真光寺様／寺名ロゴ)



名古屋市南区にあります曹洞宗金剛山真光寺様のロゴを作成足しました。私が過去に作成した作品「光」を気に入ってくださっていましたので、そのデザインをベースにやわらかな光と宇宙をイメージして描きました。現場を見た時に建築デザインが非常にモダンであったことと、「光」がテーマの建物だと伺いましたので、何となく宇宙のイメージが湧いてきました。檀家さんやお客を訪れるすべての皆さんが、真光寺という非日常と日常の狭間で、さまざまなインスピレーションが舞い降りてくるようなイメージです。

18. 應通寺様襖作品



個展にて「蓮」と書いた作品を気に入っていただいたことにご依頼くださいました。仏教のことをまったく勉強していなかったため、ご住職ご夫妻とともに親鸞聖人の足跡を辿る旅から始まりました。結果1年がかりの大仕事となりましたが、襖作品を仕上げることができたのは作家として大きな一歩になりました。

19. 「蓮」

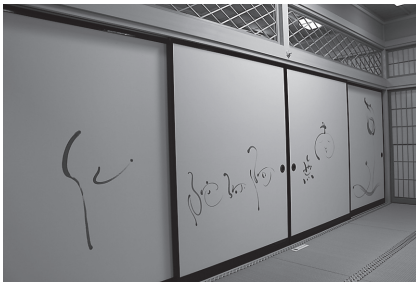


蓮は泥より出でて泥に染まらず……私の理想そのもの。

見えない部分では泥にしっかりと根を張って、こんなにも神秘的な華を咲かせる。あの迷いのない茎のようにすーっと伸びて……。しっかりと根を張って沢山の学びを得たいという願いを込めています。

色がついていますが、これも墨なのです。紀州松煙の彩煙墨というもので見た目は真っ黒な墨なのですが、白い硯で磨ると色が出てきます。原材料は膠と煤と顔料とのことで、普通の墨との違いは顔料だけなのです。煤は黒いはずなのに黒い要素がまったく出ないのが不思議です。

20. 「南無阿弥陀仏」



阿弥陀様や仏様に向き合う時に感じる「安らぎ」のような何とも言えない思い、それを表現したかったのです。「南」は阿弥陀様のお顔をイメージしていますが、人によって色々なものに見えるみたいで面白いです。

21. 「明日ありと思う心のあだ桜 夜半に嵐の吹かぬものかは」



親鸞聖人が9歳で得度される際に詠んだ歌です。

無常観・得度に対する強い決意……様々な捉え方があると思います。

親鸞さんは仏教が修行僧や身分の高い人だけのものだった時代に、どんな身分の人もすべて救われますよと布教に努めたお方。その「慈悲」や「慈愛」といったお人柄が少しでも表現できるといいなと思いました。

22. 鶴



大空飛び立つ鶴を表現しています。私は大きな鳥が大空を優雅に羽ばたく姿が大好きです。その姿からは希望を感じることができます。

これはあるお客様からのご依頼がきっかけで描いたものです。私自身もこの作品をととても気に入りまして、個展で発表するために描き続けています。これはバランスが非常に難しく、あるときは首が短くなったり太くなったり、さらに羽の部分美しくまきに羽ばたいているように描けないことが多いので、100枚近く描いて1点仕上がるかどうかといった作品です。

23. 驅



ある企業の新社屋に飾る作品として作成いたしました。企業理念は「人と社会を **Empowerment** する」でした。それは「人と社会を力づけたい」という意味だそうです。そのために社内では様々な人が動き回り、新たな企画をいきいきと生み出す姿を想像しました。これは「驅」の旧字である「驅」の漢字です。社員さんを躍動する馬に見立てました。馬の後ろには荷車がついていて、その中には沢山の「品」＝「アイデア」を詰め込んでいます。そのアイデアがやがて社会に出て人々に力を与えていきますようお願いを込めて描いています。一度は採用が決まり喜んでいたのですが、とある事情で一転不採用となり手元に残りました。

24. 蝶



春のうらかな日、庭先で黄色い蝶がひらひら舞う様子を見て、「幸せな情景だなあ……」と感動しましたので、その思いを作品に込めて、蝶という漢字を使って表現しました。

25. 樹



こちらの作品には色がついていますが、先程の「蓮」とは違い、印刷作品です。直筆で描いたものをスキャナーで取り込みまして、パソコン上で色付けし印刷した作品になります。

早朝に出掛ける用事があって駅に向かっていましたら、駅前にある大きな樹に朝日が当たりシルエットのように浮かんでいました。その情景を見て「凄く綺麗！」としばし眺めていた際の感動を表現しました

26. 流星



この作品は六本木のレストランダイニングで個展を行った際、お店が持つ夜のイメージから私の大好きな「星」を作品にしたいと作成しました。流れ星が流れる様子を「流星」という漢字を用いて絵的に表現しました。パソコン上で文字や背景に色を付け家並みも配置しているので少し説明的な作品ですが、わかりやすい表現で気に入っています。

27. Silk road



こちらは「シルクロード」というお店の方からのご依頼で描いたものです。私は体調維持のためジョギングをするのですが、その時に楽しみにしているのは空を見ることなのです。日々刻々と変化する雲の模様や光の美しさを見ていて作品のヒントを貰えることもあります。これはある秋の日、筋雲がどこまでも続く道のように見えたので、そこからヒントを得てこの作品が仕上がりました。

以上皆さんにご覧いただいた文字ですが、私がイメージした内容と皆さんが実際に見て感じたイメージは同じではないかもしれません。見る人によって受け取り方が違うのも魅力の一つだと思います。

28. 出初め式でのパフォーマンス「繫」



今年の1月に豊橋球場で行われました出初め式にて、特大の紙にパフォーマンスを行いました。

描いた文字は「繫」です。私の方からこの文字を提案させていただきました。消防に携わる皆さんはチームで繫がりを持って団結し、私たち市民にとっても心強い存在でいれます。防災のためには私たちもそれぞれの地域で繫がりを深めることも大切です。「繫」の「糸」が太く繫がることで、「この1年豊橋が平穏無事でありますように」、そのような

な思いで選んだこの文字です。

初めの一画目……勢い余って転びそうになりますが、何とか持ちこたえました。その後の記憶はありません。とにかく必死に描き終えました。「無事に終わってよかったー」と作品を見ると、「1画足りない!!」。私はショックで倒れそうでした。文字を仕事にしている私にとって、そしてこのおめでたい場であってはならない事件です。

退場後すぐ担当の方に事実を伝えましたが、ご担当の方は「感動しました！ 謝らないでくださ

い！大丈夫です！」と何とも優しい笑顔で……。私は頭を壁に打ち付ける程、不甲斐ない自分にやりきれなかったのです。

するとそのような私を見て、消防のある方がお話をしてくださいました。

「日光東照宮はあえて1本柱を逆さまに入れているんです。それは完成させたらもう進歩しないから。ずっと後世まで技術が継承されて行くためにわざと完成させていないそうです。」

「今回鈴木さんが1画足りないまま完成させたのには何か意味があるんじゃないですか？」

「私たちが本当に繋がる心を持ってた時に初めて完成するのかもしれない。」

こんなとんでもないことをした私にとって、救いの言葉となりました。

その後消防の皆さんが話し合い「すべてのイベントが終わってから書き足しましょう」ということに決まります。せっかくなので皆さんと一緒に描きたいと伝えまして、もうすぐ定年を迎える署長さんとの共同作業で「皆さんの繋がりが深まりますように」と念じながら書き足し完成しました。

家に帰り、多くの方がくださった温かい表情や想いに感動し号泣しました。

数日間は夢でもうなされ続けた程です。

私は小さな頃から「どこか抜けてる」人でした。今回1画抜けて完成したあの文字は私そのもののようです。それでも多くの方の助けがあって完成した「繋」は、私が多くの方に支えられ皆さんのお力で補っていただいていることの象徴だと感じました。

失敗を深く反省し、それでもありのままの不甲斐ない自分を受け入れて頑張らなければと決意を新たにしました。この世の中で起きることには意味があって、経験しなければならぬ学びなのですね。

ここからは豊橋筆についてお話させていただきます。

私はすべての作品を豊橋筆で作成しています。他の産地の筆を使用したこともありましたが、豊橋筆の質の良さを実感し、この筆にしか出せない線を見つけてからというもの、他の筆は使えなくなってしまいました。穂先まで神経が行き届いているかのような精密で繊細な作りに感動すら覚えます。もしこの筆がなくなったら仕事もできませんし、作品すべてが描けなくなってしまいます。そのくらい頼り切っている私の分身のような筆です。



豊橋筆の歴史を簡単に紹介させていただきたいと思います。

1804年三河吉田藩主が京都の職人である鈴木甚左衛門を藩のために筆を作る御用筆匠（ごようふでしょう）として迎えたことが始まりです。筆の製造は下級武士の副業として取り入れられました。明治に入り芯巻筆から水筆（すいひつ、毛筆）の製法で筆が作られるようになり、豊橋筆の基礎となりました。水筆は水を用いた「練り混ぜ」を行う豊橋独自の方法です。練り混ぜを行うことによって、墨含みが良い・墨はけが遅い・墨になじみやすく滑るような書き味が出るという特徴が出ます。豊橋は山間部で狸やイタチなどの獣毛が山から容易に手に入れることができたため、産地として発展したそうです。筆1本を仕上げるのに36工程もあるのですが、そのすべてを1人の職人さんが請け負うことにより、その1本の筆に対する責任が増すことが、質が高い理由の1つであると思っています。現在はほとんどの毛が輸入されています。薬品を使って皮から毛を抜くことが常識となりつつある今でも、豊橋筆の高級筆に関しては皮から毛を1本1本抜くことで毛の

色や弾力を損なわずに質の良い筆が出来上がるようです。

私が使用している筆（すべて販売されている物を持参）

白楽 いたちと羊毛（羊ではなく山羊）

淡遠 馬のしっぽと羊毛

祥鶴 馬のしっぽと羊毛

乾坤 馬のしっぽ

面相 いたち

幽意 羊毛